

モンゴル人留学生の夢を応援したい

「将来は科学者になって、国の発展に貢献したい」

すべては2008年4月、山形県立東根工業高等学校を訪れたモンゴル人留学生、エンフボルド・ポロルトヤさんの言葉から始まった。この日、同校生徒会との交流会に参加したエンフボルドさんは、「将来の夢は？」という生徒たちの問い掛けに、「国の環境問題を解決し、国のために貢献したい」と力強く語った。

「国のために」という言葉に衝撃を受けました。私たちとほとんど年齢が変わらないのに……と、言う生徒会長の後藤真成さん。何とか彼女の夢の手助けをしたい。モンゴルで電力不足が深刻な問題になっていると聞いた後藤さんたちは、手作りの太陽光発電システムを届けられないかと発案した。「授

業で学んだことを生かしてできる、私たちらしい国際協力だと思っただけです」。

そして08年7月、「光プロジェクト」の光の架け橋「心の架け橋」がスタートした。最終目標は、モンゴル遊牧民の移動式住居「ゲル」に太陽光発電システムを普及すること。その第一歩として、エンフボルドさんの母校である新モンゴル高等学校に太陽光パネルを設置し、現地の高校生に技術を伝えようということになった。

電子システム科の庄司洋一先生と佐藤和彦先生の指導を受けながら、生徒会を中心となり太陽光パネルと周辺機材を製作。「ゲルで使用することを考え、折りたたんで持ち運びできる設計にしました。誰でも操作ができるよう、スイッチ一つで電源が入るようにしています」と3年生の青木悠紀さん。何度も改良を繰り返し、数カ月かかって太陽光パネル6枚、発光ダイオード（L

山形からモンゴルを照らす光を

モンゴルの人々の生活に、光を届けたい。山形大学のモンゴル人留学生との出会いから始まった、山形県立東根工業高等学校の「光プロジェクト」。工業高校ならではの、ものづくりの技術を生かし、モンゴルのために太陽光発電のシステムづくりに取り組んでいる。

LED照明、インバーターを完成させた。生徒たちの努力の結晶——あとはこれをモンゴルに届けるだけとなった。

私たちの思いを太陽光パネルに託す

プロジェクト開始から1年以上。今年8月、ついに生徒会の8人がモンゴルに旅立った。海外に行くのはみんな初めてだ。「出発する日まで、モンゴルに自分たちが作ったパネルを設置するという実感がありませんでした」と

言う3年生の武田翔太さん。エンフボルドさんの故郷はどんな所だろうと、飛行機の中で思いをはせていた。

まず彼らが向かったのは、寄贈先となる首都ウランバートルの新モンゴル高校。手作りのマニュアルを片手に、現地の生徒たちと一緒に設置作業が行われた。「分からないことがあると、どんな積極的に質問してくれて。その情熱に気が引き締まりました」と3年生の寒河江めぐみさんは話す。国は違っても同じ高校生。一つの目標に向



(上)パネルを一枚一枚丁寧に組み立てていく両国の生徒たち。その表情は真剣そのものだ
(左)3年生の齋藤匡さん(中央)が中心となりLED照明を製作



(上)新モンゴル高校の屋上に設置された太陽光パネル。点灯式には多くの人が集まった
(下)点灯式で涙するエンフボルドさん(左)。「皆さんが作ってくれた太陽光パネルは、モンゴルの発展に必ず役立つと思います」



光プロジェクトのメンバーと新モンゴル高校の生徒たち

かつて作業を進めるうちに、いつしか両国の生徒の間には、国境を越えた固いきずなが生まれていた。そして翌日、待ちに待った点灯式。一時帰国していたエンフボルドさんをはじめ約100人が見守る中、電源が入れられた。そしてライトが光り、電気が流れラジカセが鳴ったその瞬間、その場は大きな拍手と歓声に包まれた。「実は機材に不具合が見つかって、ギリギリまで修理をしていたんです。ホッとしました」と庄司先生。モンゴルの人々の笑顔の前に、全員が「やってきてよかった」と達成感をかみしめた。

彼らの挑戦はこれで終わりではな

い。今後は現地から発電量のデータを収集して、システムの稼働状態を定期的にチェック。2年かけてさらに改良を続けていく。「プロジェクトを通して、生徒たちは本当に頼もしくなりました。これからは、県内の企業などとも積極的に連携して地域おこしにも役立てたい」と大津清校長は期待する。

屋上の太陽光パネルを眺めながら、1人のモンゴル人の男子生徒が言った。「この光は、私たちの学校だけでなく、未来への道も照らしてくれる」。海を越えて、山形の高校生から贈られた太陽光発電システム。たかさんの人の夢を乗せて、今日も明るい希望の光を放っている。